第２７５回　番組審議会

１．日　時　　　平成３０年9月１１日（火）１２：００～
２．場　所　　　メトロポリタン盛岡ＮＥＷ　ＷＩＮＧ　３Ｆ「星雲 東の間」
３．委　員　　　委員総数　　　　　８名
　　　　　　　　出席委員数　　　　５名（欠席委員数　３名）

○ 出席委員（敬称略）

砂子田　智（副委員長）
―以下５０音順―
石田　征広
菅原　正二
高橋　博昭
八木橋　伸之

○ 会社側出席者（４名）

小原　忍　　（取締役副社長）
藤原　銀司　（常務取締役）
齋藤　秋水　（常務取締役）
工藤　浩　　（取締役）

○ 事務局　　佐々木　久仁子

４．議題　　『東日本大震災から７年６ヶ月
　　　　　　　　　　～三陸鉄道の復旧復興、そしてこれから～』

講　師：　望月　正彦　様　（三陸鉄道株式会社　前代表取締役社長）

５．議事概要

今回は、三陸鉄道株式会社前社長の望月正彦様を講師に迎え「東日本大震災から７年６ヶ月～三陸鉄道の復旧復興、そしてこれから～」と題して講演して頂きました。議事の概要は以下の通りです。

●三陸鉄道株式会社前社長　望月正彦様のお話

・三陸鉄道の社長に就任したのが、２０１０年６月。その９ヵ月後に東日本大震災が起こった。３月１１日午後２時４６分に震災が発生。２時４９分に大津波警報が出され、３時４分には車両の中に災害対策本部を作った。

・本部に持ち込んだのは、ホワイトボードとノート１冊。ホワイトボードには、重要事項を全部書き出した。ノートには、分単位で何時何分に誰から誰にどういう指示を出したか、何時何分に誰と誰が協議をしてどういう結論になったのか等を全部書き出した。人間の記憶ほどあてにならないものはない。ノートに書き出したことは、本当に良かったと思っている。

・災害対策本部で指示したのは、４点。まず、社内外との連絡体制を確保すること。２点目は、乗客、社員の安否確認。３点目は被災状況の確認。そして４点目は、この段階から復旧の手順を検討しておくことだった。

・２０１１年３月の全線調査で、元に戻すだけで８０億円、ある程度津波対策をすると１１０億円の経費がかかることが分った。沿線は、少子高齢化、過疎化が進んでおり開業当時に比べると高校生の数は半分に減少していた。そして開業１０年間は黒字だったが、平成６年以降ずっと赤字が続いており「鉄道復旧にこだわらなくてもいいのではないか」「なぜ無理して復旧させるんだ」という意見もあった。しかし、自分は必要だと思った。

・日本では、鉄道が廃止されて栄えた町はなく、あっという間に地域が衰退し

て、地図から町が消えていった。また、三陸鉄道は赤字だったが、地域振興に貢献していた。三陸鉄道に乗って、泊まって、食事をして、お酒を飲んでお土産を買って帰る。経済効果が非常に大きいと思った。３つ目は、マイカーは、普及しているが、高校生、お年寄り、病気の方の通学、買い物、通院について「三陸鉄道は貴重な生活の足」であった。４つ目は、「鉄道の持っている安全性が大事」という点からも必要だと思った。

・３月中に全体の２／３の区間で運行を再開した。こだわったのは、被災地域で最初に動かすこと。「メディアは、悲惨な話だけではなく明るい前向きな情報も伝えるはず」と思い、積極的に働きかけた。また、基本的に隠し事はなし、「全部報道していいですよ」という姿勢で、取材の申込みは週刊誌も新聞も全部受け、マスコミの力を通じて情報発信しようという気持ちが強かった。

・災害が起こった時、一番大事なことは、家族で逃げる場所、連絡方法を話し合っておくこと。二つ目は、簡単に諦めないこと。３つ目は、素早い対応は良い結果が出ることが多いということ。４つ目は、一生懸命頑張れば応援してくれる人が出てくる、「努力すれば報われる」ということだと思っている。

・三陸鉄道は、来年３月２３日にＪＲ山田線宮古・釜石間を引き受け、１６３キロを結ぶ日本で一番長い第３セクターの路線となる。経営は非常に大変だと思う。是非、皆様のご理解、ご協力をお願いしたい。

６．審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

７．審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

※平成３０年９月１２日（水）　産経新聞　東北版

※平成３０年９月２２日（土）午前４時１２分から４時１５分ま「めんこいテレビ番審リポート」として放送

※据え置きの書類を作成し、本社受付、各支社に備置き一般の人々が自由に閲覧きるようにした

８．その他の参考事項

特になし

※次回は、平成３０年１０月９日(火)１２時より当会場にて開催予定です。